

中部支部巡検会報告：有度丘陵北東端の地層の観察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 青木, 克顕 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00024595">https://doi.org/10.14945/00024595</a>

# 中部支部巡検会報告： 有度丘陵北東端の地層の観察

青 木 克 顕

## 1. はじめに

2014年3月1日(土)、佐藤弘幸会員を案内者として、中部支部巡検会を行った。参加者は、地学会員7名、静岡科学館職員と静岡市理科同好会員9名で、久しぶりに多くの参加者を得て楽しい1日となった。

今回は、下島海岸での現世海岸地形と砂・礫の観察、安倍川河口デルタでの河口流路、流木や礫、海浜砂礫層断面の観察、矢部での有度丘陵の地層を観察した。特に、矢部では新しい露頭を観察でき、多くの収穫があった。以下に、その概要を報告する。

## 2. 巡検ポイント

### (1) 静岡市駿河区下島海岸 (静岡市立大里東小学校の南、国道150号線脇)

海岸浸食の進む海岸地形の説明を受けた。波打ち際には堆積と浸食の相互作用により形成されるビーチカスプという半月側に陸にくぼんだ地形がみられた。

この浜は、多くが安倍川から供給された砂礫で形成されており、砂は主に瀬戸川層群の頁岩が砕かれたもので全体に黒い浜を形成している。このような黒い浜というのは、全国的にはかなり珍しい。また、大崩海岸から供給された玄武岩の礫も見られ、参加者は、案内者の用意した岩石標本を参考にしながら、岩石の収集を行った。



図1. 礫層断面を観察する参加者

収集された岩石を分類すると、次の12種類が見られた。①砂岩②砂岩+石英脈(鉢巻石)③石英④シェール(頁岩)⑤礫岩⑥砂岩⑦チャート⑧閃緑岩⑨石英安山岩⑩斑レイ岩⑪石英粗面岩⑫玄武岩。このうち、⑨⑩⑫が竜爪帯の火成岩、⑧⑩は瀬戸川層群のものと思われる。多くの種類を集めることができたが、花崗岩や変成岩がみられないのが、この海浜礫の特徴であるとのことである(分類は佐藤弘幸会員による)。

### (2) 静岡市駿河区中島安倍川河口 (風力発電機「風電君」の南)

安倍川河口にて、扇状地的三角州(ファンデルタ)の形成について、案内者より説明を受けた。西側からの沿岸流により、安倍川の河口付近は流路が大きく東に曲っており、砂礫洲も波と河の流れが拮抗しており、河の側にウオッシュオーバーファンが見られる。河道の壁面は、現世堆積物が観察

静岡市立千代田東小学校



図 2. 根古屋泥層と久能山礫層の不整合面

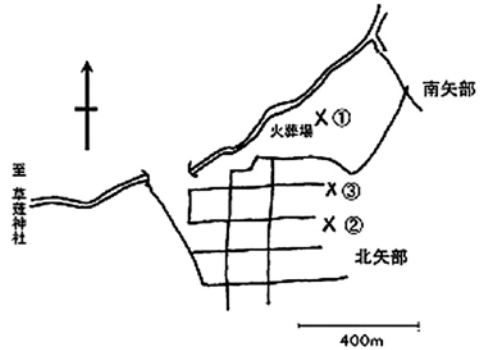


図 3. 露頭位置概略図

できた (図 1)。海と河川の相互の浸食・堆積作用により、浸食しながら堆積が行われている様子がその接合面からわかる。礫がインプリケーションを示したり級化層理を示したりする部分の多くは海成によるものとの説明を受けた。

(3) 静岡市清水区南矢部・北矢部 (清水火葬場より東進、右折して日本平山頂方向へ)

この地域の地層は、下位より根古屋層、久能山層、草薙層、小鹿層が重なる。この地点では、根古屋層と久能山層が観察できる (図 2, 図 3-①)。

根古屋層は青灰色で、切り開いたばかりのため大変きれいに見えた。細粒のシルトからなり、オオシラスナガイが採集された。佐藤会員によると、「この貝は、水深 250 m 付近の海底に生息しており、個体の中には殻が離れたものや幼貝がいることから、群集を作りながら生き埋めになったり、死滅して水流で再移動したりしたものと考えられる。」とのことであった。写真中、下部根古屋泥層を不整合で覆っているのが久能山礫層で、境界面は海底谷の形状をしている。谷の比高は 15~20 m にも及び、ここでは海底谷を充てんする形で久能山礫層が堆積していることが分かる。

さらに移動すると、久能山礫層の主部に相当する大規模斜層理が見られる (図 3-②)。砂礫層が斜めに傾き、礫にはインプリケーションが見られる。環境は当時のデルタ前置層にあたると思われるとのことである。露頭の下部から、ロッセリア生痕化石 (静岡県地学会 H P 参照 <http://www.shizuoka-chigaku.org>) を採集することができた。ロッセリアはフサゴカイの生痕化石と考えられ、海底の砂の中に棲管を泥で作って体を支え、海底面の泥に触手を広げて泥の中の養分をとっている。有度なのは、砂礫中に棲管を伸ばしている点が珍しいということである。また、この砂礫層中の礫は、下島海岸の礫と同じであり、現在の下島海岸と同じ地域から運ばれてきた堆積物とわかる。

さらに移動すると、オオシラスナガイやイタヤガイなどが、同じ地層面から採集できる場所がある (図 3-③)。先ほど述べたとおり、オオシラスナガイは水深 250m に棲息しており、イタヤガイは 10~50m に棲んでいることから、浅海から流れ込んだ堆積物中にイタヤガイが含まれており、陸棚斜面近くのデルタ末端に堆積したものである。

この南矢部・北矢部の露頭は、現在圃場整備のため切り開いている最中あり、早晚見ることができなくなってしまう可能性が高い。